

小宇宙としての個

プラトン『ティマイオス』のコスモゴニー

山 川 明 子*

The Human Being as a Small Cosmos :

The Cosmogony of Plato's "Timaeus"

YAMAKAWA Akiko

abstract

Plato tried to solve the question why the cosmos has an order, why the cosmos, human beings and material things can be said to be now at their best. He read Anaxagoras' book, but he couldn't find the answer. He solved the question in Timaeus. Plato insists that our soul is tripartite; wisdom, bravery and desire in The Republic. In Timaeus, his work of natural science, he continues his theory of the soul. He explains how the Demiurge created the cosmos, human beings and souls etc. The cosmos has an order. There is a soul in the cosmos, and the soul controls the cosmos. Wisdom, the supreme part of the human soul, which the supreme Demiurge created, is divine and controls other parts of the soul and the body. The cosmos is a picture of human beings. Plato's cosmogony is, therefore, humanism. Plato admires human beings as a small cosmos in that it is the best and the most beautiful thing.

Keywords : the cosmos, nature, order, soul, Demiurge

1. 出発点一問いの設定

ソクラテスは若い頃自然研究に熱中した。その経緯はプラトンの対話篇『ファイドーン』に詳しい。

「僕は若かった頃、あの自然を探求する学問に驚くほど熱中したのだった。それぞれの事物が何によって生まれ、何によって滅び、何によって存在するのかという原因 (*aitia*) を知ることは、僕にはすばらしいことに思えた。」(96A)¹⁾

「ある人が、アナクサゴラスの書物らしいものを読んでくれて、万物に秩序を与える (*διακοσμῶν*) 原因となるものは、理性 (*νοῦς*) である、と聞いて、その『原因』に共鳴した。なぜなら、理性を万物の原因であると考え、それは、ある意味で、結構なことだと思ったからだ。そして、もしそうであるなら、この秩序を与える理性は、それが最善であるような仕方でも物を秩序づけ、個物を位置づけるであろうと考えた。」(97B～C)

ソクラテスは、万物を秩序づける原因となっているものは、理性であるというアナクサゴラスの考えに惹かれたのである。そこで彼の書物を読み進めていった。ところが、それはソクラテスの疑問に、すなわち「万物の秩序の原因となっているものは何か」という問いに、満足のいく解答を与えなかった。

キーワード：宇宙、本性、秩序、魂、創造主

*平成6年度生 比較文化学専攻 (桜美林中学)

「太陽や他の天体についても、それらの相対的な速度や回帰などの現象について、同様の探究を、すなわちそれぞれがこのような働きをしたり受けたりするのが、なぜより善いのかを尋ねようと決意した。なぜなら、彼（アナクサゴラス）がこれらのものが知性によって秩序づけられたというからには、現在のありかたが最善なのだということ以外の原因をそれらに与えるとは、僕には考えられなかったから。」(98A～B)

ソクラテスが満足する説明は、「なぜ万物が現在のようにになっているのが最善といえるのか」という問いに答えるものでなくてはならないのである。それなのにアナクサゴラスは、理性など使っていない。例えば、今私がここに座っている原因を骨や関節や筋肉の構造と機能、運動などに求めるように、「空気とかアイテール、木、その他たくさんのくだらないもの(98C)」を原因としているのであった。

万物の秩序の原因を、物質的側面から機械的に説明することは、ソクラテスを、またその継承者であるプラトンを、決して満足させることはできない。なぜなら、機械的な説明は、万物がこのようであることは偶然であると説くにすぎないからである。先ほどの「ここに座っている原因」の例も、偶然このようであるということ、要素に還元してみせたにすぎない。骨や筋肉組織の分析は、偶然このようである状態、他のありかたも可能であるがたまたまこのようである状態を、精密に記述して見せたにすぎない。ソクラテスはこのような説明を「真の原因と、それがなくては原因が原因たりえないものを混同している(99B)」ものとして退けるのである。

万物がこのような仕組みになっているのは、偶然ではない。万物が現在のように秩序を保っていることの必然性を示す説明原理があるはずである。ソクラテスが宇宙全体についての研究に没頭したのは、この問題意識からである。

無論、どこまでが師ソクラテスの問題意識で、どこからがプラトン独自の思索であるかの詳細は知る由もない。この後プラトンは、この問いを心の底深く沈め、理性によってのみ到達できるイデア界についての綿密な検討を重ねた。そして最終的な解答を、後期対話篇である『ティマイオス』において見出したと、筆者は考える。

『ティマイオス』において、プラトンは自然(φύσις、フュシス)の問題に正面から取り組んだ。多分に神話的要素を盛り込み、ピタゴラス派やオルフェウス教等プラトンが馴染んだ思想も織り込み、宇宙の創造から人間の創造までを記述した対話篇、それが『ティマイオス』である。これは一応対話篇の体裁をとってはいるものの、ほとんどが登場人物ティマイオスによる講義という形式をとっている。それはすなわち、プラトンによる自然学の講義とみて差支えないだろう。この宇宙万有がいかにか創造されたか。宇宙は、魂は、人間は、どのようなしくみになっているのか。そして、それはなぜか。万有の本性(フュシス)を明らかにすることは、プラトンにとっては、万有に秩序を与える原理をさぐることであり、現在のありかたが最善であるといえる原因を探求することである。

プラトンは、『ティマイオス』に先立つ『国家』において魂論を展開し、『ティマイオス』における最終解答の足がかりをつかんだと思われる。本稿では、まず『国家』で得られた図式を確認する。その後、『ティマイオス』における解答を読み取っていきたいと思う。

2. 『国家』の魂論—魂の三分

プラトンの著作はほとんどが対話篇であるため、プラトン自身の意図が明確にされていないといつてよく、対話篇どうしを関連付けて読むことには、常にある種の危険が伴う。だが『ティマイオス』については『国家』との関連で語られることが多いため、あながち無理なこととは思われない。『ティマイオス』の登場人物たちによる対話の導入は、ソクラテスのこのような言葉である。

「昨日は、国家がどんな体制のもので、どんな成員から構成されれば最上のものになるかという、私の意見を話した。だから今日は、私に話のご馳走のお返しをしていただく。」(17C～20C)¹⁾

昨日の話とは、明らかに『国家』の内容を指しているので、この導入は『国家』との連続性を示しているとみてよいはずである。『ティマイオス』では、『国家』において語られた魂論をふまえて、それを宇宙論的に展開するという作業がおこなわれたと考えられる。²⁾

まず、『国家』の魂論をみていこう。

『国家』は、始めに個人の正義について議論していたのであったが、国家全体の正義の方が大きくて学びやす

いから、まずは国家の正義を探求することにしたのであった。

さて、国家には様々な職業が存在する。我々は、素質（フュシス）の点で異なっているので（370B）、人間が自分の素質に合った一つのことを、正しい時機に、他の様々なことから解放されて行く場合に、より多く、より立派に、より容易になされる（370C）、と説かれる。まずここで、プラトンは、素質を重視する。すべての成員が本来の役割を全うし越権行為を慎むこと、これは秩序成立の根本条件である。このことは、後の宇宙や学問全体の秩序の基礎を示唆しているともいえるかもしれない。

「国家は、正しいしかたで建設されたならば、完全な意味で優れた国家であるはずだ。とすれば、この国家は「知恵（σοφία）」「勇気（ἀνδρεία）」「節制（σωφροσύνη）」「正義（δικαιοσύνη）」をそなえていることは明らかである。」（427E）

これらの徳目を順に考察していく。国家に知恵があるとはどういうことか。それは、国家の最小部分である守護者に知恵があることである。国家に勇気があるとは、軍人が戦いにおいて勇気を発揮することだ。では、節制、正義についてはどうか。

ここで、国家の建設においてプラトンが最も腐心したことは、国家全体の幸福であることを想起しよう。決して支配者階級のみが幸福であればよいとは考えていないことを、彼は力説している³⁾。彼の理想国家とは、異なった本性を持つ国家の成員を有機的に統一する国家である。では、国家の成員を有機的に統一するとはどのようなことか。これは、次の記述から容易に予測できる。

「節制は、思うに、一種の秩序（κόσμος）であり、様々な快楽や欲望を制御することだろうと思われる。」（430E）

「おのれに克つ」という言葉のように、自分の中の劣った部分を、優れた本性をもつものが制御している状態を、秩序という。これを国家に当てはめると、秩序ある国家とは、守護者が国民を欲望のままに動くことがないように制御している状態をいう。この段階では、支配者と軍人が一緒になっており、「国の守護者（φύλαξ）」と呼ばれている。（427E～431A）

「知恵」「勇気」はどちらも国家の特定な部分のうちに存在するが、「節制」すなわち「秩序」は「調和（ἀρμονία）」に似ていて、国家の全体に行きわたっている（432A）といわれている。支配者の視点は、常に国家全体を見据えている。それぞれの職人の技術が何のために存在するか把握している。だからこそ、国家に秩序を与えることができるのである。それに対し、被支配者の視点は全体的俯瞰ができない、目先のことばかりにこだわった視点である。

「正義」についても全体に関わっているという点では「節制」と同様である。すなわち、「金儲けを仕事にする種族、補助者である軍人たち、支配者の種族が、国家においてそれぞれ自分本来の仕事を行っている場合に、正しい国家となる（434C）」と言われている通り、国家の成員全員が、自己のフュシス通りのことを過不足なく行い、全体としての秩序を保っている状態が正義である。

ただし、全員がフュシス通りのことをするとは、全員が平等であることを意味しない。支配者は支配者としてのフュシスを発揮して、被支配者の頂点に立ってこれを支配することが秩序ある国家としては不可欠のことである。

さて、我々が国家の中に見出したものを、今度は個人の場合に当てはめよう（434E）と、魂の区分が始まる。個人の魂にも優れた部分と劣った部分が存在する。魂がそれによって理（ロゴス、λόγος）を知るところのものを、魂の中の「理性的部分」、様々な欲望を感じて興奮するところのものは、魂の中の「欲望的部分」である（439D）と、まず魂を二つに区分する。その後、「それによって我々に怒りを起こさせるもの、気概」を持ち出す。まず「気概」を欲望的部分の一部であるとするが（439E）、後に理性を助け欲望と戦う怒りがあることを喚起する。そして、「気概的部分」は理性的な部分を補助する部分であるとして独立させ、三つの部分とする。すなわち、人を正しい方向に導く理性、理性を助け、理性の命じる方向に進むように鼓舞する気概、それら二者が抑えなくてはならない欲望。国家においては支配者が、個人の魂においては理性的部分が、他の部分を制御している状態、すなわちそれぞれの部分がフュシス通りの働きをしている状態が「秩序」であり、「正義」である、と言われている。

『国家』のこの部分における成果は、「秩序」の基本原理は「理性」であるという洞察である。秩序ある国家は支配者が被支配者を、秩序ある魂においては理性的部分が欲望的部分を、それぞれ支配し抑制している。魂においても国家においても、正義とは秩序のことである。理性的部分がすべてを決め、他の部分はその決定に従う、

ということが秩序の根本原理なのである。

ただ、ここにおいて論じられた秩序はあくまで人間世界のものであって、宇宙全体にまでは未だ抜けられていない。このような状態が最善であるとなぜ言えるのかという問いにいたっては、全くといってよいほど手をつけられていない。

3. 『ティマイオス』における魂の生成

宇宙全体には秩序が遍く行きわたっている。ギリシア語では、宇宙も秩序も同じ「コスモス」という語で表される。天体が規則正しく運行し、そのおかげで植物が生育し、その植物を食べて動物は命をつなぐ。なぜ宇宙はこのようになっているのか。偶然このようになったのだろうか。否、計画的に創られたとしか思えないではないか。

『ティマイオス』は、「万物を秩序づける原因は何か。現在のありかたが最善であるといえるのはなぜか。」という問いに答えるものとして、どうしても書かれなければならなかった。『国家』において、秩序の根本原理が理性であるということを示した。このことは『ティマイオス』への重要なステップであった。万有の始原から現象界まで、実在のフュシスの結びつきを全体的に俯瞰することをもって学の完成と看做すプラトンには、この後人間を含む宇宙全体を考察することは不可欠のことだったのである。

では、『ティマイオス』の概要を、魂の生成中心に概観してみよう。

語り手はソクラテスではなく、「我々の中で最もよく天文学に通じていて、万有のフュシスを知ることを自分の仕事としてきた」(27A)というティマイオスである。彼に宇宙の始まりから人間のフュシスまでを語らせるのだと、登場人物であるクリティアスに前置きをさせる(27A)。

「宇宙は、常にあり続けたものではなく、生成したものである。なぜなら、それは見られるもの、かたちをそなえたものであり、すべてそうしたものは感覚されるものであり、感覚されるものは、思惑(δόξα)によって、感覚の力を借りて把握される。そういうものが、生成するものであることは、すでに明らかにされたことだからである。(中略) 製作者は、原因となるもののうち最善のものであるから、宇宙は言論(ロゴス)と知性(フロネーシス、φρόνησις)によって把握され、同一であり続けるものに倣って製作されたのである。」(28A～29B)

宇宙は感覚によって捉えられるものだから、生成したものである。それは、ロゴスと知性によって把握され同一であり続けるもの、すなわちアイデアを範型として製作されたという。生成された宇宙万有には、生成の原因としての製作者が存在する。製作者が可視界にあるものをモデルとして製作するならば、作品は美しくない。製作者が知性界にあるもの、すなわちアイデアをモデルとして製作するならば、作品は美しいものになる。この宇宙は知性界をモデルとする似姿だから美しいのである。

この先に、宇宙が「似姿(εἰκῶν)」であるから、「ありそうな言説(εἰκῶς λόγος)」しか成り立たないという記述がある(29D)。この箇所についてはいくつかの見解があるので少し触れておく。まず、「ありそうな言説しか成り立たないので、真面目に取り上げるべきものではない」とする解釈⁴⁾。それはいささか極端であるとしても、この宇宙について語られていることは確実な知識ではなく蓋然的なものにならざるを得ない、このことは宇宙について語る人間が持つ本性によって避けられないのだと、人間の限界を表明しているフレーズであると解するのが一般的である⁵⁾。それに対し、この箇所に「そもそも自然学の理論は近似的・蓋然的・確率的であることを免れえないというプラトンの洞察」を読もうとする、藤沢令夫の解釈は、蓋し卓見である⁶⁾。

「製作者は優れた善きものであり、彼はすべてのものが自分自身によく似たものになるように望んだ。これこそが生成界と宇宙との最も決定的な始原である。神は、すべてが善きものであり、劣ったものが一つもないことを望み、このように可視的なものすべてを受け取ったのだが、それは無秩序に動いていたから、これを無秩序な状態から秩序ある状態へと導いた。」(29E～30A)

「製作者は、どれもが完全なすべての材料から、一つの全体性を備えて完結した、不老無病のものとして、この宇宙を製作した。」(33A)

製作者は、原因となるもののうち最善のものであるから、その作品も最善なものである。宇宙は、およそ生成されたもののうち最善にして最善なものである。ここではプラトンの宇宙賛美が言葉を尽くして語られている。宇宙に秩序を与えたのは神である。宇宙がこれほど美しいのは、秩序が存在するからである。

では、製作者は何と解釈するのがよいか。ここに後のキリスト教的な創造主を読み込む解釈が一般的である。それより、製作者＝神を「擬人化された理性」とするヴラストスの解釈⁷⁾が興味深い。なぜなら、『国家』において、秩序の原因は理性であるとされていたからである。

「本性上可視的であるような事物のうち、どんなものでもそれぞれ全体として考えられる場合には、理性なきもののほうが理性あるものより優れて立派なものになるはずはない。ところがまた理性は、魂を離れては何物にも宿ることはできない。そこで、この推理の故に、神は、理性を魂のうちに、魂を身体のうちに結びつけてこの万有をまとめあげたが、それは、本性上もっとも立派でもっとも善き作品を完成したことになるように、ということだった。この宇宙は、神の先々への配慮によって、真に魂を備えた生き物として生まれたのである。」(30B～C)

まずは、宇宙全体に魂が与えられた。そして、理性は魂を離れることはできない。ガスリーは、ここでの魂は『国家』において三区区分された魂の部分のうちの最下層、すなわち欲望的部分であると解する⁸⁾。しかし欲望的部分は、制御を受けるべき部分であり、それだけでは秩序をもたらすことはできない部分であった。すると、宇宙に秩序があるのはなぜなのか、説明できなくなってしまう。むしろ、B・スネルによる、『ティマイオス』のここでの魂概念は、ホメロスのそれに近いという見解を採りたい。以下にまとめておこう。

魂が「生きている限り人間のうちにとどまっている生命の息」としてあり、半ば物質的な機関である。思考し感覚するという機能はない。その欠如を補うのがテューモスとノオスである。前者は「情・動」の機関であり、後者は知識や思考の座である⁹⁾。

『国家』では、理性の指導的役割が強調されているばかりであったが、この『ティマイオス』においては、理性は生命活動なしに存在することはできないという、ギリシアの伝統的魂観を確認している。まず、理性を含む魂を備えた生き物としての宇宙が誕生した。

「神は、身体が支配されるべきもの、魂はその主人となり支配すべきものとして、これ(魂)を、生まれておいても、特性においても、より先であるもの、より年長であるものとして構成した。」(34C)

「そして、宇宙の身体は目に見えるものとして生み出されたのだが、魂の方は、見えないけれどもロゴスと調和を備えたものとして、知性界の存在者のうちで最も優れた者によって、生成したもののの中で最も優れたものとして、生み出された。」(36E～37A)

そもそも宇宙に魂があるとはどういうことか。宇宙の魂も、身体としての万有を支配する。宇宙はロゴスと調和を持ち、およそ生成されたもののうちで最も美しい。宇宙全体に秩序をもたらすものとしての魂の働きは、宇宙の生命活動全体に調和をもたらす人間の魂の働きと同じである。これで、宇宙と人間のアナロジーの基礎的図式が完成した。

「神々よ、私が作り主となった神々よ、(中略)未だ死すべき定めのもので生成されずに残っている。これらのものが生じないでは、宇宙は不完全なものとなるであろう。私によってそれらのものが生まれるなら、それらは神々にも等しいものとなってしまふ。したがって、あなたがた(宇宙の製作者が作った神々)は、それらの種族が死すべきものとなるよう、かの生き物の制作に向かうがよい。」(41A～C)

死すべきものとは、人間を始め様々な動物のことであるの言うまでもない。死すべきものになるためには、最美にして不滅である宇宙の製作者、すなわち至高の神が製作することはできない。至高神の生み出した神々、すなわち善性において劣る神々に、その製作は委ねられなければならない。人間はしたがって、宇宙と同じ構造を持ちながらも宇宙よりは一段劣る存在者として製作されたのである。

「かの生き物には、不死なるものと名を等しくするにふさわしい部分があり、神的と呼ばれ、これは彼らのうちでも、常に進んで正義に従い、あなた方神々に従おうとするものの導き手となるのだが、その部分については、私が種を播き、手始めをなした上で、あなたがたにゆずり渡そう。」(41C)

この「不死なるものと名を等しくするにふさわしい部分」とは何か。魂全体を指すのではないことは明らかである。この部分は通常、三区区分された魂のうちの「理性的部分」すなわち知性を指すと解するのが一般的であり、この見解に異存はない。ただ、少々補足したい。

『国家』における魂の三区区分で、「理性的部分」を補助する「気概的部分」があった。スネルによるテューモスもそれである。「不死なるものと名を等しくするにふさわしい部分」の後、「常に進んで正義に従い、あなた方神々

に従おうとするものの導き手」とある。「気概的部分」は、「理知的部分」が正しいと判断していることがらを、実際に行動に移させる力のようなものである。『国家』には、自分が不正なことをされているときに「気概」が呼び起こされ、正義のために武器を取る、とある(440C～D)。正しいと判断するだけでは「正しい人」であることはできない。「気概」により、正しい行動にみちびかれてこそ、正しい人といえる。このことを考えると、「不死なるものと名を等しくするにふさわしい部分」には、「理性的部分」「気概的部分」の両方が含まれるとみてよいのではないだろうか。

「そして全体を構成し終わると、それを星と同じ数だけの魂に分割し、それぞれの魂をそれぞれの星に割り当て、馬車に乗せるようにして乗せると、掟が告げられた。魂は人間に生まれなければならない。魂が身体の中に必然的に植え付けられ、すべての魂に一樣な感覚が、次に快苦と混じり合った愛欲、さらに恐怖や怒りなどすべての感情が生じる。そのようなものを克服すれば、正しい生き方をすることになり、しかるべき時間を立派に生きたものは、自分の伴侶である星のすみかに帰って幸福な、本性にあった生活をするであろう。そうできなければ、第二の誕生で女に生れ、なおも悪を止めることができなければ、野獣に変化し、最も善い状態に至るまで、変転を重ねて苦勞が絶えることはない。」(41E～42Dのまとめ)

魂の輪廻転生が語られる場面である。魂は受肉して人間となるが、理性が欲望や恐怖といった負の感情を克服すれば生まれ変わることはない、という。ここで、「理性」だけが輪廻転生から免れている、という主流の解釈¹⁰⁾について考察しておきたい。先ほどまでに確認されたことから、「理性」は魂の他の部分と独立して存在することはできないのだから、なぜこのような解釈が生まれるのか疑問に思う。おそらくこの解釈は、上記の部分で「理性がその本来の仕事を成し遂げたら再び生まれることはない。生まれ変わるとしたらそれは欲望などの感情のせいである。」と解するところから導かれる帰結であろう。それに対し、J.T.ロビンソンは、三つの部分とも輪廻転生からは免れることができない、と主張する。確かに、理性のみが不死なる部分である、という記述はあるものの、欲望も気概もそれに結び付けられているのだから、それらが死すべき部分であるからといって、消えてなくなってしまうことにはならない、というのが彼による反論の要旨である¹¹⁾。輪廻転生についてはプラトンが親しんだとされるオルフェウス教などの影響がみられるが、ここでは立ち入らない。問題なのは、「理性」のみが不死で輪廻転生を免れているのか、それとも魂全体が不死であり輪廻転生するのかということである。筆者はほぼ全面的にロビンソンの見解に与する。すなわち、輪廻転生するとすれば、それは理性ばかりではなく、魂の他の部分、気概も欲望も共に輪廻転生すると主張されていると考える。理由は簡単である。理性が魂の他の部分と離れては存在できないと先に宣言されていたからである。不死であることは、輪廻転生しないことの原因にはならない。まして同義ではない。ロビンソンは「理性のみが不死なる部分である」という記述にこだわっているが、そこからは「理性が輪廻転生しない」という帰結は出てこないのだから、「魂全体が輪廻転生するという見解にたいする最大の障害」というにはあたらない。魂の理性以外の部分について、それが死すべき部分だからと言って消えてなくなってしまうわけではない、というのはまさにその通りで、先のスネルの言葉を借りるなら、魂は「死とともに口や傷口などから立ち去っていくもの」である。思うにこの箇所は、理性が本性上欲望のような身体由来の感情を支配する存在であることを、輪廻転生という神話的モチーフを借りて説明した部分であると解すれば十分であろう。ただし、いずれの解釈を採るにしても、理性が特別な地位を与えられていることに変わりはない。理性は神的なものであり、それゆえ魂の他の部分や身体を支配することができるのである。人間におけるこうした秩序は、最終的には宇宙論的に基礎づけられたのである。宇宙においては天体の規則正しい運行、人間においては欲望などの感情の克服と、様々なレベルの秩序が存在するが、どの秩序も理性を頂点としているのである。理性によって形成される秩序こそが宇宙の本質であるということができよう。

「宇宙は、死すべきものも不死なるものも取り入れて、こうして満たされ、目に見える生き物どもを包括する感覚される神として、最大なるもの、最善なるもの、最美なるもの、最も完全なるものとして、誕生したのだ。それは、唯一の、比類ないものなのだ。」(92C)

『ティマイオス』はこうして幕が閉じられる。宇宙は魂を備えた生き物である、と言われていたが、最後には、感覚される神である、と言われるにいたるのであった。

『ティマイオス』の宇宙論において、『ファイドーン』における自然学的な疑問が解決された。プラトンは、アナクサゴラスに理性を用いた説明を期待したとあった。プラトンにとっては理性による支配こそが最善にして

最美な存在の根本原理である。宇宙も人間と同様に、身体と魂を持つ。それはどういうことか。宇宙の身体とは天体のことであろう。魂の中には理性が存在し、それが宇宙ないし人間の身体を支配し、全体に秩序をもたらす。理性こそが、秩序をもたらすという『国家』以来の原理は、ここにおいて宇宙にまで拡張されたのである。

4. 結び

『国家』で、長い学びの道の最後は、「万有の始原に到達する。いったんその始原を把握した上で、今度は始原に続くものを次々と辿りながら最後の結末に至るまで下降する」(511B)とあった。この「万有の始原」は、通常善のアイデアを指すと考えられている。『ティマイオス』では、善き創造主である神と考えられる。善き創造主が製作した完全な美としてのこの宇宙は、まさに「万有の始原」すなわち「善のアイデア」の具象化としてプラトンの目に映ったことであろう。

宇宙には魂があり、魂には理性が結び付けられた。宇宙に理性が宿ること、これこそが宇宙に秩序が存在することなのである。なぜ宇宙には秩序があるのかという、ソクラテス以来の疑問に、プラトンはこういう解答を与えたのであった。

人間にも、生命力たる魂が宿り、その神的部分を理性と呼ぶ。人間はそのまま宇宙の似姿なのであった。しかも、宇宙の理性と人間の理性は、作り主が一致している。宇宙は知性界の似姿であり、人間は宇宙の似姿であるから、プラトンの宇宙論は、人間論とのアナロジーである。したがって、宇宙秩序も人間において理性が自らのフュシスを発揮している状態、すなわち欲望を制御・抑制している状態になぞらえて理解されたのである。

かつて、プラトンは魂对身体という対立の枠組みの中で『ファイドーン』を執筆した。身体の故に魂はその本来の働きを阻まれ、欲望達成に執着し、そこに縛られる。このはっきりとした霊肉二元論は、肉体を持つこと、生命あることに対する悲観的想いをつねに纏っている。それが、後期の『ティマイオス』ではどうだろう。魂の、生命力としてのフュシスを喚起し、人間に在って理性とともに宇宙的秩序をつくる大切な役割が与えられたのである。プラトンがフュシスを大切に続けたことは、『国家』のところで述べたとおりである。自然学の集大成として晩年に執筆した『ティマイオス』により、プラトンは師ソクラテスの若き日の疑問に答えただけでなく、自然と生命、そして人間の一体性を回復しようと試みたのかもしれない。魂と物質は、概念としては区別できても、存在としての区別はできないと言っているかのようである。

デモクリトスらが原子論を唱え、自然界のすべての事象を原子(アトム、分割できないもの)の集合離散によって記述しようとしたことはよく知られている。すると人間の活動も、生命維持から高度な精神活動まで、すべて原子という「もの」に還元できてしまうことになる。そのことによって、万有の秩序を記述することは可能である。ただその記述は「どうなっているのか」という原理を解明すること以上の意味を持たない。「ここに座っていること」の理由を、筋肉組織を始めとする身体構造の解明に求める志向性を、ソクラテスもプラトンも受け入れることができなかつたのであった。たとえ、科学が進歩した現在の説明を彼らが聞いたところで、やはり受け入れがたい思いは変わらないだろう。「座っていること」がなぜ必然的であり、最善のことであるのかの説明がなされないからである。知性界と現象界との峻別は、確かに原子論の批判にはなりうるが、プラトンはまだそれによしとはできなかつた。万有のフュシスを問い直し、生命活動を行う「いのち」としての魂が宇宙にも宿り、秩序を与えているように、理性を原理とした説明を与えて一応の解決をみたのであった。魂と身体は対立する存在ではない。それらは不可分の存在なのである。

では、現在のあり方が最善といえるだろうか。それはわからない。ただ、人間は理性を原理とする限り、最善に向かうことができるのである。人間のなかで、理性のみ神的な存在であると『ティマイオス』にあった。人は、教育によって理性にその本来備わった働きをさせるならば、神的な存在となれる。するとソクラテスから継承した「魂の配慮」とは、自分の内にある神的な部分に対する配慮であるということになる。『ティマイオス』は、晩年のプラトンが宇宙を人間のあるべき姿としてとらえたものであった。理性が秩序を与えるのであるが、その理性が完全にそのフュシスを発現し、完全な秩序を与えると、その人間は最善となる。そういう人間は、理性の原理が支配する、限りなく美しい秩序ある存在である。プラトンが見出した宇宙創造の目的、それは秩序の根本たる人間理性の創造である。プラトンの自然学講義である『ティマイオス』は、人間理性への限りない信頼と

尊敬の念を表す書物でもあったといえるのではないだろうか。

注

- 1) プラトン著作の使用テキストは、Platonis Opera, Oxford Classical Texts. 訳は筆者によるが、その際、プラトン全集（岩波書店）、Loeb Classical Library を参考にした。
- 2) プラトンの対話編は、その内容上・文体上の特徴から、前期・中期・後期に区分される。『国家』は中期対話編、『ティマイオス』は後期対話編とされるのが定説である。ただ、オーエンはその説に異議を唱えている。すなわち、『ティマイオス』を最後の作品と看做すときに、他の後期対話編群との間に生じる解釈上の困難を指摘することによって、『ティマイオス』は『国家』に続く作品として読まれるべきであるということを論証する。G.E.L.Owen, The Place of the *TIMAEUS* in Plato's Dialogues, *The Classical Quarterly* 3, 1953. (邦訳「プラトン対話編における『ティマイオス』の位置」ギリシア哲学の最前線 I、東京大学出版会所収) オーエンの指摘に対する筆者の見解はこうである。『ティマイオス』の語り起こしは『国家』の内容確認で、その話の続きであるとい設定 (27A～B) にしてあることから、『ティマイオス』・『国家』執筆の間にどれほどの時間的隔たりがあろうと、それら二者の間にどれだけの対話編が執筆されようと、『ティマイオス』はどうしても『国家』との関連で読まれなければならない。
- 3) N.P.White, *A Companion to Plato's Republic*, Basil Blackwell, 1979, p.85, p.106～108
- 4) F.M.Cornford, *Plato's Cosmology*, HACKETT, 1935, p.31～32
- 5) 原 正幸、「プラトンの『ティマイオス』とハルモニア」、東京大学教養学部人文科学科紀要 65, 1976
- 6) 藤沢令夫『プラトンの哲学』岩波書店、1998、p189
- 7) G.Vlastos, *Plato's Universe*, Washington 1975, p.26
- 8) W.K.C.Guthrie, *A History of Greek Philosophy V, The later Plato and the Academy*, p.275
- 9) B.Snell, *Die Entdeckung des Geistes*, Hamburg 1955, p.17～42
- 10) W.K.C.Guthrie, "Plato's Views on the Nature of the Soul", ed.G.Vlastos, GardenCity, 1971, 2:233～4, T.M.Robinson, *Plato's Psychology*, Toronto, 1970, p.124 など。
- 11) James.V.Robinson, "The Triparted Soul in the *Timaeus*", *Phronesis*, 1990, Vol.XXXV/1

(2007年12月1日受理)